

國學院大學學術情報リポジトリ

鍛冶屋・鉄工所・鉄工団地への変化とふいご祭りの
伝承：
足利鉄工団地協同組合、太田西部金属協同組合の事
例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 迪子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001434

鍛冶屋・鉄工所・鉄工団地への変化とふいご祭りの伝承 —足利鉄工団地協同組合、太田西部金属協同組合の事例から—

黒 田 迪 子

論 文 要 旨

本稿では栃木県足利市の^{あしかがてつこうだん ちきょうどうくみあい}足利鉄工団地協同組合と群馬県太田市の^{おおた せいぶ きんぞくきょうどう}太田西部金属協同組合を中心にして鉄材を扱う人びととその仕事の変遷、そしてふいご祭りについて取り上げた。明らかになったのは以下の点である。第一に、この2つの事例では鉄材を扱う仕事には近代から現代にかけて^{かじや}鍛冶屋から金属加工業の組合へと至る4つの段階があった。第二に、足利では町工場が組合への参加によって会社経営が充実していったのに対し、太田ではもともと会社経営が充実していた状態で組合が結成された点など両者の展開が異なっている。第三に、ふいご祭りについて足利も太田も金属加工業の祭りとしてふいご祭りを行なっている点は共通しているが、その伝承過程には相違がある。足利の場合は第一に述べたような変遷を経て前身が鍛冶屋でない会社も祭りに加わるようになり、新たな^{なんぐうたいしゃ}南宮大社の鍛錬式に影響を受けて今日の形になったが、一方で太田は野鍛冶の祭りとして^{かねやまさま}金山様のふいご祭りを継承している。第四に、足利のふいご祭りでは象徴的な奉納物のリングや公的な祭礼への展開などから民俗伝承の中の創造性を、また鍛錬式の役割の名前の継承性からは民俗伝承の中の伝承力を見出せる。第五に、いずれのふいご祭りでもみかんを用いていることが確認できたが、その意味についてこの2事例だけではその意味は明らかにできないということからも前稿で論じた民俗学の比較研究法の有効性を確認することができた。

はじめに

本稿は日本民俗学のいわゆる比較研究法の有効性について確認しその実践例として鍛冶とふいご祭りの伝承の全国的な展開の状況について追跡してみた前稿⁽¹⁾に対応するものとして、事例研究の視点からの一成果として提出するものである。日本各地の民俗伝承の実態追跡をもとに事例ごとの相違点と共通点とを比較分析する方法にとって、その基礎となる個別の事例ごとの伝承情報の追跡は必要不可欠である。そうした観点から本稿では、1960年代に中小企業振興事業団法の下に設立された栃木県の足利鉄工団地協同組合と群

馬県の太田西部金属協同組合という両毛地域の2つの鉄工団地を中心に、足利市と太田市において近代から現代における鉄加工を担う主たる人びととその仕事の変遷を追うこととする⁽²⁾。中小企業振興事業団法は昭和42年(1967)7月に公布された法律で、目的は中小企業の高度化に向けての指導や貸付け等の事業を行なうことによって中小企業の振興に寄与することであった⁽³⁾。こうした法律が制定された背景としては、その当時、高度経済成長の時代(1955-1973)から国際化時代を迎えつつあり、そうした中で工場集団化や共同化などといった中小企業の組織化が図られていたことが行政上の理由として挙げられる。また、それぞれの会社ごとでも、従来のような町の中での操業では手狭になり、騒音などの公害が問題視されるといった局面を迎えていた⁽⁴⁾。こうした流れの中で誕生したのが足利鉄工団地協同組合や太田西部金属協同組合などの団地進出のための組合であった。

ふいご祭りは、足利鉄工団地協同組合、太田西部金属協同組合の両方で確認できる。足利鉄工団地協同組合で現在行なわれているふいご祭りの形は、昭和48(1973)年から始まった比較的新しい形のものである。これは、鉄工団地で鉄材を扱う人たちが、鉄工業という職種のアイデンティティを確認する今日的なものと想定される。一方、太田金属協同組合のふいご祭りは、鍛冶屋を先祖としているアイテック株式会社がそのアイデンティティを確認するものと想定される。このように、同じふいご祭りという名称を持った祭りでも、伝承と変化が起きていると考えられる。そこで、それらの違いと動向を具体的に明らかにするのが、本稿の目的である。

1. 足利鉄工団地協同組合

(1) 足利鉄工団地協同組合の設立から現在へ

小林機械製作所 足利鉄工団地協同組合の設立の原動力として注目されるのが小林機械製作所の存在である。その歴史は文政2年(1819)に刀鍛冶の小林初五郎が北猿田に移転して創業したことから始まるといい、栃木県の文化財として刀鍛冶であったこの小林氏の刀が登録されている⁽⁵⁾。その後、1870年に織物機械の製造業者となり⁽⁶⁾、そこで修業をした人たちがそれぞれ鉄工所を開くなどしていった。現在の足利鉄工団地協同組合でいえば相澤鉄工所や伊藤鉄工所などの現在の経営者の先代や先々代が、その小林機械製作所で修業をした人たちに当たる。

足利鉄工団地協同組合の設立 足利鉄工団地協同組合設立のための説明会は昭和39年(1964)から開かれた。しかし、足利鉄工団地協同組合の結成は一筋縄ではいかなかったという⁽⁷⁾。まず、足利鉄工団地協同組合の説明会に参加し、足利鉄工団地に進出した企業

は表1の通りであった。前述のように小林機械製作所で修業した経営者のほか、小林機械製作所のように鍛冶屋から織物業に関する企業になったのではなく、機屋（ハタヤ）から織物業に関する企業に変化した後に、鉄工関係へ発展した企業も加入するなど、一口に鉄工団地と言ってもその加盟の企業の前身は多様なものであった。設立当初から自社の社長を務め、鉄工団地協同組合では理事長も務めた菊地歯車株式会社の菊地義治氏（1937年生）の回顧談によると、当時、説明会に参加したのは、足利市に点在する町工場の人たちが中心であったという。彼らは工場が手狭になったという切実な問題から新しい工場を探し求めている。しかし、町工場の人たちは、職人気質で、みな親分肌だったために、組合についての話し合いはなかなかまとまらなかったという。

そうした中でこの組合をまとめ上げたのは小林機械製作所の小林英二郎氏であった。小林英二郎氏は小林機械製作所の常務であり、足利鉄工団地協同組合設立のための委員会では、実質的には足利鉄工団地協同組合には参加しない員外理事を務めた。小林氏は小林機械製作所で修業を積んだ人たちに鉄工団地進出に参加するよう声をかけ、まとめ役として奔走したという。また、小林氏の義弟が大蔵省の主計局にいたため、団地進出のための予算配分など、栃木県が動き出すよりも早く、内々に国に取り計らいもしたという。その小林機械製作所の会社としての大部分は昭和60年（1985）頃に消滅してしまったが、その一部（旧大正町工場）はミコトマシナリー∞と名前を変えて、現在でも足利市内で営業を続けている。

結局、足利鉄工団地協同組合には表1にみるような18社が参加することとなり、昭和44年（1969）から昭和46年（1971）にかけて現在の足利市福富町の足利鉄工団地へ進出することとなった。説明会には当初30社が足を運んでいたが、団地への進出には連帯保証となるために躊躇する企業も多く、結果として18社に減り、団地進出後に間もなく1社が脱退し、実質的には17社が草創期の加盟会社となった⁽⁸⁾。相澤鉄工所の相澤鶴松氏の回顧談によれば、このときに共同責任というリスクを負ってまでも組合となったことが、今日足利鉄工団地協同組合が掲げる「一蓮托生」や「和の精神」といった気運を高めたとも考えられる⁽⁹⁾。足利鉄工団地協同組合ははじめ知らない人たちの集まりということで、宴会、旅行、テーブルマナー教室、ソフトボール、小唄など、多くの親睦行事がさかんに行なわれた。そして、こうした機会に深まった絆は、親睦行事の数が減った現在でも、親世代から子世代に代わっても続いているという⁽¹⁰⁾。

足利鉄工団地協同組合の現在 足利鉄工団地協同組合は当初加盟していた18社からその後8社へとその数を減らしたが、現在も同地で存続している。途中で組合を脱退した企業の主な理由は後継者不足による経営継続困難である。他にも、限られた生産品目のため

【表1】足利鉄工団地協同組合加入企業情報と生産品目及び所持機材の変化

	会社名	創業	元々の所在	団地 進出 年	資本金 (S53 当時)	資本金 (現在)	従業員数 (現在)	紹介者	来歴	S53 (1978)	平成10 (1998)	平成20 (2008)	現在 (2015)
1	株式会社相澤 鉄工所	S3	足利市通1丁目	S45	1200万	1000万円	20名	小林氏	鶴松氏の父が小 林機械で修業	建設車輻機械、主軸、 保安装置、製袋機コン ベアー変速装置	都市ガス用バルブ・船 舶向動力シャフト等・ 各種産業機械部品製造	都市ガス用バルブ・船 舶向動力シャフト等・ 各種産業機械部品製造	曳船用特殊推進装置向 各種動力軸類、陸用・ 船用原動機向各種中・ 大型部品、産業・工作 機械向ボールネジ輪加 工、第三世代携帯電話、 基地局用電動伝送装置 及び特殊バラボラン テナ、都市ガス向ボー ルバルブケース加工、 新開輪転機用特殊ロー ル部品加工、荷役・建 機向シャフト・ピン類 加工。他、機械加工品 全般
2	A工業有限会 社	S8	?	S45	300万	600万円	22名	?	繊維機械（ジャ ガード）	ダイカスト金型の設 計・製作、ダイカスト 製品の鋳造及び仕上 加工	アルミ・亜鉛ダイカス ト金型設計製作・アル ミ・亜鉛ダイカスト鋳 造	アルミ・亜鉛ダイカス ト金型設計製作・アル ミ・亜鉛ダイカスト鋳 造	ダイカスト金型の設 計・製作、ダイカスト 製品の鋳造・加工 全般
3	株式会社I機 械製作所	S5	足利市昌平町	?	1200万	2000万円	70名	?	繊維機械（ジャ ガード）	油圧機器、自動車、農 業機械部品加工及び省 電力化装置、治具、専 用機設計製作	印刷機械・溶接ロボッ ト関連部品製作・一般 産業機械設計製作・組 立	溶接ロボット関連部品 製作・印刷機械、一般 産業機械設計製作・組 立	半導体関連設備、産業 機械、各種省力化機械、 印刷機械ユニット、各 種精密部品、専用機・ 治具設計製作
4	有限会社I鉄 工所	S26	足利市昌平町	S45	500万	500万円	18名	相澤氏	おじいさんが小 林機械で修業	各種自動車部品	各種自動車部品製造	各種自動車部品製造	自動車部品製造（ユニ バーサルジョイント）、 油圧ジャッキ部品
5	O木型株式会 社	S20	?	?	240万	—	—	?	父親が工業高校 の先生	一般木工機械一式、特 殊正面盤、万能彫刻機	(S61脱退)		
6	菊地齒車株式 会社	S15	足利市本庄3 丁目	S45	1500万	3000万円	101名	?	別記	自動車、油圧機器、建 設機械、産業機械用歯 車、スプライン、スプ ロケット等の各種歯車	中型・小型歯車・歯車 減速機・歯車ポンプ製 造	中型・小型歯車・歯車 減速機・歯車ポンプ製 造	各種歯車および歯車装 置の製造・設計
7	株式会社K鉄 工所	S8	足利市伊勢町	S45	200万	—	—	?	東京から来た人 の鉄工所	ドリル刃尖自動・全自 動研磨機、全自動カッ ター研磨盤、カムフラ イス加工	(S61脱退)		
8	有限会社H鉄 工所	S21	足利市山川町	?	200万	500万円	5名	?	現社長の相父が 小林機械で修業	各種板金、ステンレス 加工及び金型溶接 加工	各種板金・ステンレス 加工	各種板金・ステンレス 加工	各種板金、ステンレス 加工、ダイカスト金型 補修（産業機械部品、 建設設備製品）

9	F 機材株式会社	S32	?	?	800万	—	—	?	高校の先生	アルミ・鉄各種フレーム及びボール。アルマイト水筒、各種健康レジャー用品、カークラバイ用品	(S63脱退)			
10	株式会社B鉄工	S43	(団地発足とともに設立)	?	200万	—	—	小林氏	文化建築の一部門	工場、店舗、住宅の設計施工	(H10脱退)			
11	H合名会社	T7	?	?	300万	—	—	?	織物染色加工業	ルームエアコン部品、電気冷蔵庫部品、自動車及び各種機械用熱交換器部品	(H2脱退)			
12	株式会社Y鉄工所	T5	足利市伊勢町	S45	200万	3000万円	5名	役所	ボイラー、鉄塔製作／小林機械系	各種(水・油)タンク類、鉄骨鉄塔製作。排水、汚水処理設備冷暖房付帯工事一式	製缶・板金・溶接・ステンレス加工・設計・施行	製缶・板金・溶接・ステンレス加工・設計・施行	製缶、板金加工	
13	株式会社A精機	S41	?	S46	1050万	—	—	?	小林機械の親戚で小林機械で営業	100～180度特殊反転式ダイスボツテングプレス、高出力トライアルプレス、高速度深絞りプレス他油圧プレス一式、専用工作機械(ロータリー型、トランスファ型)	(H1脱退)			
14	N株式会社	S43	(団地発足とともに設立)	?	5000万	—	—	?	小林機械製作所金型部門	建設機械並びに部品製造。金型設計製作。その他の産業機械製造	(H9脱退)			
15	有限会社S精機	S21	?	S46	400万	—	—	?	?	カークレーラー部品、自動車部品	カークレーラー・自動車部品製造			一般産業機械 企画・設計・製作・組付け施工、各種部品加工・機械修理
16	S 機械株式会社	S43	足利市助戸東山町	?	500万	2000万円	25名	?	創業者が小林機械系	機械の製作、部品加工組付調整及び機械の移設	各種機械設計製作・部品加工組付調整			
17	S 産業株式会社	S35	?	?	2000万	—	—	?	もとは荒物屋だったが、息子が慶應義塾を出て空調設備大手のダイキンの下のダイキンをよう請けをするようになった	空調設備、給排水設備、廃水汚水処理施設等の設計、施工及びメンテナンス	(S61脱退)			
18	株式会社Y製作所	?	?	?	?	—	—	?	小林機械でミニシンの営業をしていた	—	(S50脱退)			

この表は足利鉄工団地協同組合からお借りした記念誌と菊地義治氏のお話をもとに作成したものである。
 創業年、創業地、資本金、従業員数、いずれをとっても異なる企業であったことが確認できる。
 小林機械製作所で修業した人のいる会社は8社あるが、員外理事である小林氏の紹介で加入したことが明らかになっているのは2社のみである。

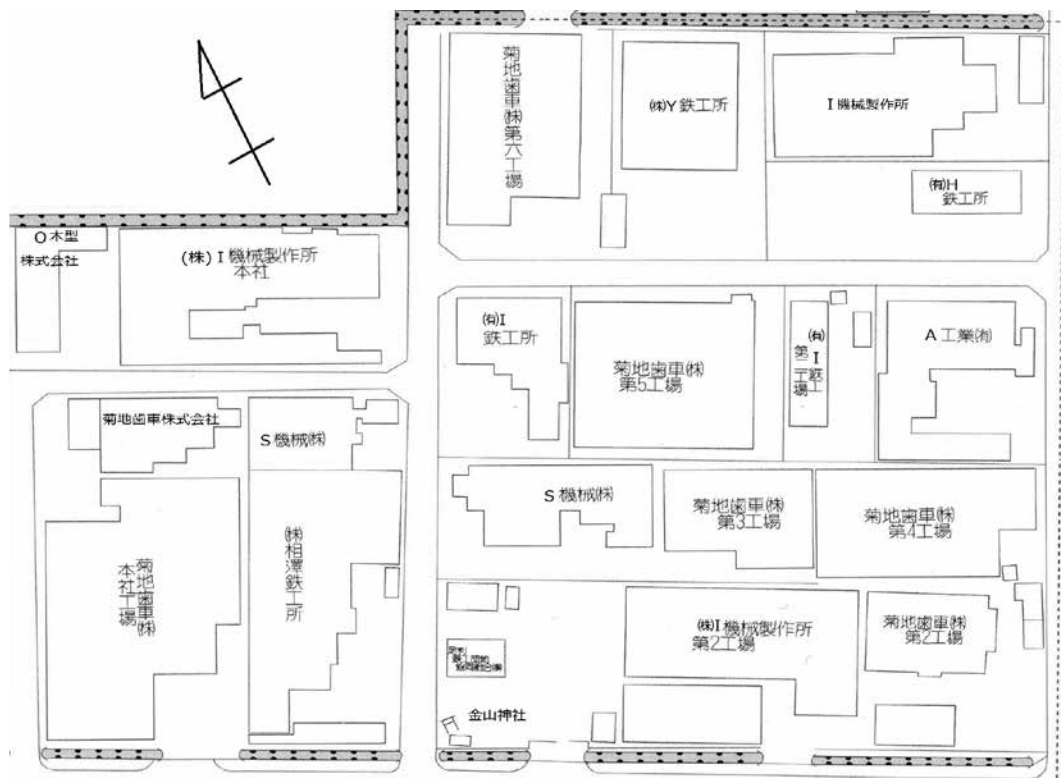


図1 足利鉄工団地協同組合関係の会社配置図

に、時代に対応していけなかった企業もあったようである⁽¹¹⁾。しかし、そうした企業が脱退した際には、団地内の有力な企業がその工場を買収することで団地内に空きを作らない状態を保ってきている（図1参照）。

製作品目は、一般的にはその違いはわかりづらいが、8社がそれぞれ微妙に違うという。それは表1にみるとおり⁽¹²⁾であり、設立当初は自動車部品を製作していた会社が多い。現在に近づくにつれ自動車部品に限らず、需要に応じて幅広い製作品目に変化している。

また、足利鉄工団地協同組合で行なわれてきている共同事業に注目してみると、昭和53年（1978）の時点でのそれと現在とでもほとんど変わらず行なわれており、それはいまだに重要な足利鉄工業協同組合の核となっているといつてよい。ただし、機械事業だけは共同事業の中に現在はもう見られない。その理由としては次の2点が考えられる。①団地進出の年数も経ち、それぞれの会社で安定した機械設備が整ったから、②共同事業でないと購入できなかった機械類（パソコン/NEC 昭和60年（1985）、昭和61年（1986）に5台購入）がその後は個人でも手に入るほど身近なものになったから、である。

(2) 足利鉄工団地協同組合のふいご祭り

(1) 金山神社とふいご祭り

神社と祭神 足利市域の鉄工業関係の会社が加盟しているより大きな組合が足利鉄工業協同組合である。その金山神社例大祭としての、ふいご祭りは、足利鉄工団地協同組合事務所の敷地内にある金山神社で行なわれている。足利鉄工団地協同組合事務所は東武和泉駅から徒歩25分ほどの場所にある。この金山神社はもともと大正13年（1924）に足利市伊勢町の飯成神社の境内に祭られたものであったが、駅南側の区画整備を受けて昭和42年（1967）同じ伊勢町内に移転後、ふいご祭りを行なうのに手狭だということで、さらに昭和49年（1974）にここ福富新町の足利鉄工団地協同組合事務所の敷地内に移転されることとなった。鉄工関係者などからの浄財を受け、当時の金額で1000万円ほどかけて社殿を新築した。祭神は金山彦命である。なお、もと大正13年（1924）に作られた金山神社の石碑には、鍛冶屋や石屋などのほかに織物業者の名前も見られる。これは織物業にも鉄工機械が使われることに関係して、織物業の企業も金山神社の奉斎に加わったためと考えられる。このことから、足利鉄工団地協同組合設立以前、機屋であっても金山神社を奉斎するようになった企業もあったと考えられる。

祭祀集団 このふいご祭りの主催者は名目的には広く足利市域の鉄工業関係の会社で構成されている足利鉄工業協同組合である。その足利鉄工業協同組合には、足利鉄工団地協同組合に加盟している会社でも重複して加入しているところもある。しかし、実質的な担い手は鉄工団地内の企業で構成されている足利鉄工団地協同組合である。祭礼のための資料や資財、道具が置かれているのも足利鉄工団地協同組合の事務所であり、実際に準備するのも足利鉄工団地協同組合に加盟している会社の社長たちである。

祭日 岐阜県の南宮大社の本社では毎年11月8日にふいご祭りが行なわれているが、ここ足利鉄工団地協同組合ではその月遅れということで、12月8日を祭日の基準としている。ただし、土日祝日のために前後することがある。

(2) 平成25年度の祭礼

日時と場所 現地調査を行なった平成25年度（2013年度）は12月8日が日曜日だったため、近くの学校の児童生徒の登校日である12月6日に行なわれた。午前10時から、足利鉄工団地協同組合事務所敷地内にある金山神社と駐車場スペースで行なわれた。

道具 ふいご、金床、火床（ほど）、金槌などといった鍛冶仕事に必要な道具が準備される。ここで使われるふいごは、かつて鍛冶屋だった人たちからの寄贈品が多いということである。それは足利鉄工団地協同組合の関係者ではなく、外部の人たちからのものであるという。このふいご祭りには、足利市域に住む元鍛冶屋の人たちが、「家でもむかしふ

いご祭りをしていた」と言って、懐かしんでやってくることがある。したがって今日用いられているふいごはこの祭りが始まった当初から使い続けているものではなく、こうした寄付を受けてからのものであり、現在用いているのは何代かの代替わりを経ているふいごだという。

参加者 参加者は足利鉄工業協同組合と足利鉄工団地協同組合に加盟している企業の関係者が中心である。ただし、ふいご祭りの案内状は組合に加入していなくとも、足利市域在住でわかる範囲の金属加工会社に出しているという。また、学校やマスコミ各社にも足利鉄工業協同組合がふいご祭りを行なうと連絡しているため、とちぎテレビや下野新聞など地元報道関係者の姿も多く見られた。小学校4年生は授業で足利市の産業について勉強するため、ちょうどいい社会科見学の機会になっているようである。また、近くの工業高校である足利工業大学付属高校の生徒も見学に来るが、午前10時の開始より早く来て、鉄工団地内の工場を見学するのだという。高校生にとっては会社見学の機会でもあるのである。鉄工団地組合の敷地内の祭りの会場には、アクリル製で空気が出る仕組みがわかるふいごが置いてある。祭りの日程を決定するのに児童生徒の都合を考えていることなどからみても、外部からの見学者を重要視していることがうかがえる。このようなふいご祭りの見学は平成10年代後半に始められたものであるという⁽¹³⁾。

祭りの役（ふいご－先手－横座－奉行） 準備は前日から行なっており、今年役を務める人たちが、練習を行なう。役は下の役から上の役まで、ふいご－先手－横座－奉行、と4つあり、ふいご祭りの際に前に出てふいごを使い、鉄を鍛える鍛錬式を行なう。それぞれ1名だが、先手は2名いる。役を務める人たちは、足利鉄工業協同組合に加盟している企業から選ばれているが、その基準は特にないという。役を務める人たちは毎年違う。下の役から上の役まで（ふいご－先手－横座－奉行）順に上って行き、最後に奉行を務めると役を務めることは終わりとなる。しかし、全員が必ずしも奉行まで務めるというわけでもない。次の役まで1年2年、間が空くことはざらである。決まった選考基準もなく経験年数もとくに問わないというが、新入社員が行なうということはほとんどない。役を務める人は、組合に加入している会社から順番に出している。その際、会社の格式や歴史のようなものはとくに気にしないという。ふだんはふいごを使うことがないので、ふいご祭りの前日と早朝だけが役を務める人たちの練習のチャンスである。

祭りの開始 12月6日（金）の祭礼当日は、午前9時の段階ですでに準備が行なわれていた。両鉄工組合関係の人たちも多く集まっていた。祭りを見ずに、奉納金を納めるのみの人も多い。奉納金を納めると引換券を貰うことができ、帰りに御神饌と交換してもらえる。



写真1 足利鉄工団地協同組合金山神社例大祭の御神饌



写真2 金山神社の神符

私は3千円納めさせていただいたが、いただいた神饌の内容は、鏡餅、神酒、蜜柑、赤飯、それに金山比古神の神符であった（写真1、2）。神符は足利市内の織姫神社で作ったものだという。団地の企業の経営者の妻や社員の女性の姿も多く見られた。なお、鍛冶屋、とくに刀鍛冶にはかつて女性禁忌が多く聞かれたが、足利鉄工団地協同組合でも後述の太田西部金属協同組合でも、今日、女性従業員も多くそうした禁忌の伝承は聞かれない。だが、今までにふいご祭りで役を務めた人の中には女性はいないとのことである。

午前10時になる少し前に、外部に依頼して来てもらったプロの和太鼓の演奏が行なわれた。午前10時になると、神職を筆頭に今年役を務める人たちが装束に身を包み、本殿前に並ぶ。白い装束なのは、身を清める意味があるという。

鍛錬式 役を務める人たちが本殿前に並んだあとは神職が祝詞をあげ、参列者の御祓いを行なう。供物はみかん・りんご・すめ・鰯節・餅などである（写真3）。

供物は相澤鉄工所の相澤真吾氏（昭和44年（1969）生まれ）が写真を見ながら当日の朝に並べていたものである。供物と一緒に火打ち石も一緒に供えられる。しかしこの火



写真3 足利鉄工団地協同組合金山神社例大祭の供物

打ち石は時間の関係上、打つ格好をするだけで、実際にこれを用いて火をつけるわけではない。社殿の中には、今まで役を務め

た人たちの写真が奉納されている（写真4）。この写真は翌年のふいご祭りの際に奉納されている。

御祓いが終わると足利鉄工業協同組合の会長を筆頭に、足利鉄工団地協同組合の理事長や市長などの挨拶が続いた。挨拶が終わるとすぐ傍のしめ縄を張った鍛錬場へ移り、火打ち石で火を着ける格好をしてから、鍛錬式に臨み、鍛錬式が斎行される（写真5）。鍛錬の最中にはマイクでの解説も行なわれる。鍛錬式では鉄の棒を延べて、リングにして前年のものとつなぐ。リングにはそれぞれ、いつのものかわかるように年月日の刻印がされている。相澤真吾氏によれば、リングの材料はわざわざ購入するものではなく、工場を出た半端な素材を取っておいて用いているのだという。このリングは昭和49（1974）年の第1回ふいご祭りのときから作られている。出来上がったリングを午前11時30分頃に金山神社に奉納すると、式は終わりとなる（写真6）。

直会 式が終わると、経営者たちは鉄工団地協同組合の2階において直会を行なう。直会の席では、来年度に役を務める人たちが紹介される。その場には岐阜県の南宮大社の金山比古神の掛軸が飾られており、その前には手刀も置かれている。ミ



写真4 金山神社の内部に掲げられた写真



写真5 鍛錬式



写真6 鍛錬式で製造され奉納されるリング

カンは供物として置かれはしないものの、食事をするためのテーブルに添えられていた。一方、参加見学した小学生や高校生たちはふいご祭りの会場に残り、ふいごや金槌を祭りで扱ったことのある若手の経営者や従業員に指導を受けながら鍛冶体験を行なう。児童生徒には帰る際、ミカンが配られた。

団地内の金山神社と岐阜県垂井市の南宮大社
て、その本社として崇敬されているのが岐阜県垂井市にある南宮大社である。その本社にも数年に一度くらいのペースで代表が参拝に行くという。この足利鉄工団地協同組合で行なわれているふいご祭りは、南宮大社の影響を受けてのものだという。具体的には、I 機械製作所の現会長の父親が岐阜の南宮大社の神職と個人的に交流があり、南宮大社の金山祭（ふいご祭り）を足利鉄工団地協同組合に導入したことが始まりだという⁽¹⁴⁾。菊地義治氏が最初に参加した昭和34年の段階では、足利市伊勢町の神社へ業者が集まり、宮司の祝詞奏上後、参列者が、玉串の榊をお供えし、社務所で直会、解散するという、簡素なものであったという。今日、ふ

この団地内に祭っている金山神社に対し



写真7 足利鉄工団地協同組合で用いられている南宮金山彦大神の掛軸

いご祭りの酒宴では南宮大社の金山彦大神が描かれた掛軸が掛けられている（写真7）。

足利鉄工団地協同組合ではふいご祭りに関する資料を保管しており、それらを閲覧させていただいたが、そこからは道具の調達、祭りの段取り等、この祭りをとり行なうまでのプロセスを知ることができる。その保存資料から知られることの要点をまとめると、以下のとおりである。

（1）昭和47年（1972）当時は金山神社講を組織しており、月次祭があった。これは月次祭の寄進記録から昭和48年頃に消滅したものと思われる。（2）昭和47年当時からふいご祭りの式次第と供物（内容・配置）は変わっていない。（3）昭和55年（1980）には造園業者が御神酒を献じていた記録がある。このことから、金山神社の氏子が足利鉄工組合（特に足利鉄工団地協同組合）中心となる前、昭和50年代半ばまではもともと金山神社の氏子だった人たちが奉斎に加わっていた可能性がうかがえる。（4）昭和57年（1982）11月6日～8日に南宮大社へ旅行した際の写真があり、南宮大社への参拝が行なわれたことが確認できる。

以前からのふいご祭りの有無 足利鉄工団地協同組合でふいご祭りを行なう以前は伊勢町の飯成神社内の金山神社で簡素なふいご祭りが行なわれていたが、個別にいくつかの会社でふいご祭りが行なわれていたようすも聞かれた。たとえば、相澤鉄工所では現在は社内や家庭でふいご祭りを行なっていないものの、かつては家庭でふいご祭りを行なっていたという⁽¹⁵⁾。その12月8日のふいご祭りの日には家の2階で酒宴を催す大人たちのもとにビールを運ぶのがまだ子どもであった相澤真吾氏（昭和44年（1969）生まれ）の役目だったという。一方で、菊地歯車株式会社の菊地義治氏（昭和12年（1937）生まれ）は、社内でも家でもふいご祭りを行なっていなかったという。菊地氏の記憶にあるのはえびす様のお祭りで、その日はタコが食べられるのが楽しみだったという。ふいご祭りを初めて見たのは大学生時代に修行をした大阪と東京の歯車会社でのことである。

もともとふいご祭りを行なっていた会社、それは小林機械製作所で修業した会社が中心であるが、小林機械製作所は繊維関係の機械製造会社であり、その前身は鍛冶屋であった。一方、ふいご祭りを行なっていなかった会社、それは菊池歯車株式会社のように繊維関係の企業だが、その前身は機屋であった。機屋を前身としてふいご祭りを行なっていなかった会社も、組合に参加することによって組合全体でふいご祭りを行なうようになり加わっていったものと考えられる。

神社と神職 現在、ふいご祭りの祭礼にあたっているのは足利市西宮町の織姫神社の神職である。足利鉄工団地協同組合で織姫神社の神職に祭礼の依頼をするのは、もともと多くの組合加盟会社が織姫神社の氏子であったことが関係していると思われる。織姫神社はその名が示すように、織物に関係した神である天御鉾命と織女、天八千々姫命を祭っている神社である。その由緒は宝永2年（1705）まで遡ることができるという。明治12年（1879）に足利市通4丁目から現在の西宮町に遷宮したものの翌年消失し、現在の社殿は昭和12年（1937）に再建したものである⁽¹⁶⁾。足利市は足利銘仙をはじめとした織物の町として有名であり、ここ足利鉄工団地協同組合でもその織物生産の流れを汲んでいる企業がある。そのため、足利鉄工業協同組合には金山神社と重複して織姫神社の氏子となっている会社が多数ある。たとえば、菊地歯車株式会社の菊地氏によれば、織姫神社の石碑には織物業を始めた祖父と母の名が刻まれているという。前述のように菊地氏はえびす様の祭りも行なっていたが、足利鉄工団協同地合や足利鉄工業協同組合などに加盟する会社は金山神社だけではなく、かつての生産品目とも関係した多様な信仰を持っていたことがうかがえる。

2. 太田西部金属協同組合

(1) 太田西部金属協同組合の設立から解散へ

今井鉄工所 太田西部金属協同組合に参加していた企業の一つが今井鉄工所である。今井鉄工所の前身は野鍛冶である。創業者の父である芳蔵氏はもと造船所で研鑽を積み、地元尾島町に戻り、農作業に使用する農業機械の製作を主な仕事としていた。今井鉄工所は芳蔵氏の子である義一氏（1889—1952）によって、大正3年（1914）に太田市尾島で創業した。その後、昭和6年（1931）には、消防ポンプを全国に拡販するまでに至った。今井鉄工所は戦時中、埼玉県に今井航空工業株式会社を設立し、中島飛行機の下請けとして規模を拡大した。工員は最も多いときで1200名にものぼり、戦闘機を陸軍に献納したともいう。戦後、今井航空工業株式会社は解散したが、その後省力化のシステムエンジニアリング会社として株式会社今井鉄工所を設立した。また、今井義一氏は小島町議員や群馬県議会議員としても地元貢献し活躍したと伝えられている⁽¹⁷⁾。今井鉄工所は平成2年（1990）にアイテック株式会社に名称を変え、現在も同地で営業を続けている。

中島飛行機から 太田西部金属協同組合に所属していた会社の特徴として、中島飛行機で働いた後に独立して鉄工所を営むようになった人が多い点あげられる。たとえば、株式会社ヨシカワの相談役兼取締役である吉川彰充氏（太田市飯田町、昭和14年（1939）生）の父親は東京出身で、中島飛行機で働いたのち独立し、開業した。他に太田西部金属協同組合では、株式会社池田製作所の太田西部金属協同組合経営者1世代目の父親も中島飛行機で働いたのちに開業している。先にみた足利市の事例のような織物関係の企業というのはほとんどなく、繊維関係という枠でならば、メリヤスを前身とする企業がただ1社あった程度である⁽¹⁸⁾。

太田西部金属協同組合の設立 太田西部金属協同組合の設立は昭和47年（1972）のことで、団地落成は昭和51年（1976）のことである。太田西部金属協同組合には栃木県の診断によって選ばれた11社が参加した（表2）。1社ほど団地進出前に参加をとりやめたという例があるが、その企業が入るはずだった建物は太田西部金属協同組合の事務所として利用された。本来ならば工場となるはずだったその建物は事務所としては広く、1階には共同機械が設置され、設立当初だけではあったが2階には組合加盟企業の製品を紹介するスペースが設けられもした。

太田西部金属協同組合は平成24年（2014）に解散し、書類の大部分は処分されてしまったが、当時の関係者の記憶にある共同事業は次に挙げるようなものがあった⁽¹⁹⁾。

①共同機械はフライス盤や研磨機の設置（～平成初期）

【表2】太田西部金属協同組合加入企業情報と生産品目の変化

	会社名	創業	元々の所在	団地 進出 年	従業員 数 (S60)	資本金 (S60)	従業員 数 (H4)	資本金 (H4)	来歴	S60 (1985)	H4 (1992)	現在 (2015)
1	(株)K工業	S22	太田	S50	40名	1800万	60名	1800万	戦後開業	自動車部品の製造 (鉄工業)	自動車用ベダル Assy、H/R フレーム Assy、シートフレーム Assy、他、各種機件部品	自動車部品
2	M 樹脂工業 (株)	S28	高林	S49	100名	3500万	110名	3500万	金属加工	金型設計製作、射出成形加工、組立加工	金型設計製作、各種プラスチック製品、スクリーン印刷、組立	(廃業)
3	(株)I製作所	S22	太田	S49	71名	1200万	90名	1200万	現社長の父が中島飛行機で働いたのち独立	—	プレーキ部品、ショックアブソーバー部品	自動車部品 (プレーキ、ショックアブソーバー) の製造、金型設計・製作
4	O工業 (株)	S38	藤阿久	S48	19名	2000万	18名	?	メリヤス	金属プレス加工、繊維関連機器の製販	自動車部品、繊維関連機器 (裁断機 他)、レーザー加工	(廃業) メリヤス編物の解し機用のワインダー装置?
5	S工業 (株)	S45	?	S49	35名	1000万	65名	1000万	?	—	プラスチック用品金型、設計・製作、プラスチック射出成形加工、温水器ハウス製造、販売、自動車部品、弱電部品、組立加工	弱電部品・屋外用大型時計・自動車部品
6	S工業 (株)	—	?	S50	9名	2400万	3名	2400万	藤藤ホームスバンの一部門が独立	車両部品の金型製造	車両部品の金型製造	(廃業)
7	アイテック株式会社	T3	尾島	S49	35名	1500万	40名	2000万	もとは野鍛冶。中島飛行機の下請けを経て鉄工所に	各種省力化機械設計製作	自動化・省力化機器の設計・製作	各種専用機・試験機・省力化機器の設計製作、各種部品の製造加工
8	(株)S製作所	S42	由良	S48	21名	1000万	18名	1500万	金型製作	—	自動車部品金型、治工具・設計製作	(廃業)
9	(株)O電機製作所	S8	藤阿久	S48	280名	4000万	257名	8000万	?	自動車用ランプ、ミラー、灰皿、その他用品類、自動車用RR、農機具部品類、樹脂成形品、ダイカスト成形品、ヘルメット 他	自動車用電装部品、ドアミラー、ヘッドランプ、リヤコンビネーションランプ、ハイマウントストップランプ、ルームランプ、スポットランプ、アシュトレ、カバーリヤゲージ	自動車用ドアミラー、ランプ、学童用ヘルメット
10	株式会社ヨシカワ	S13	太田	S49	131名	5000万	172名	5000万	現社長の父が中島飛行機で働いたのち独立	U、Y ステンレスクラッドパイプ、ロール成形加工品、小形自動車部品加工及び集成コンテナ用扉、建築用引抜材、板金部品 集成、治具、金型、その他一般機械加工部品製造販売	自動車部品 (ドリッブ、サツシユ、モール類 他)、電機、車輛、建築金物、UY ステンレスクラッドパイプ 他	金属ロール成形、樹脂複合押し出し成形をベースにした自動車部品

この表は須藤さく江氏からお借りした記念誌と吉川彰允氏のお話をもとに作成したものである。

足利鉄工団地と同様、創業年、創業地、資本金、従業員数にバラつきがある。

しかし、資本金はいずれも1000万円以上と高額であり、その当時の企業規模が足利のそれよりも大きなものであったことがわかる。生産品目についてみれば設立当初から現在に至るまで自動車部品を中心とした生産であることが特徴である。

- ②組合全体での浄化槽の設置（～平成24年（2012））
- ③工業用水を引いていた（ただし水質が落ちるので全社が使っていたわけではない。組合解散後は大嶋電機が使っている）
- ④切手、印紙の販売（～平成24年（2012））、タバコの販売（～平成15年（2003））
- ⑤教育事業（ISO取得のための講習など）（～平成22年（2010））

また、太田西部金属協同組合は県や国からの補助金をもらう対象に複数回選ばれたという話も聞かれた。

太田西部金属協同組合の解散 組合説明会に参加した企業は20社ほどあったというが、県が診断を行なって、実際に進出する企業は11社に絞り込んだ。その後1社が進出前に参加をとりやめたものの、進出後は進出当初の10社から変動なく20年以上、組合は継続していた。太田西部金属協同組合は海外との接触が活発で、組合ではベルーからの外国人研修生の受け入れを行ない、工場の海外進出を行なった企業もある。しかし、平成24(2012)年にこの組合は解散となった。そのきっかけは、次の2点の問題が原因になったとのことである。

- ①新しく理事長が替わり、2代目理事長の提議によって、土地建物分筆後の商工中金からの融資の名義が太田西部金属協同組合になっているものの、担保である土地は各企業名になってしまったということ。貸付先は太田西部金属協同組合だが、担保であるはずの土地建物が各企業名になってしまっていた。
- ②組合で事故が起きた際、責任は組合が取るのか各企業が取るのかということが問題となった。2代目理事長が賦課金と同じ割合で負担しようと提案したところ、反対が起きたという。

また、その他の事情についての聞き取り調査によれば、一つには、平成初期に商工中金から借りていた土地建物の資金の返済が終わったこと、もう一つには、浄化槽の修理など組合ではなく各企業で行なう方が経済的であること、さらにもう一つには、前述のようにこの太田西部金属協同組合に所属していた企業には海外との接触が活発で、海外進出などを積極的に行なう各企業の活動が活発であるという点も解散に拍車をかけたと考えられる。そして、アイテック株式会社の今井氏の言葉によれば、「それぞれの会社が力を持ち、組合でいる必要がなくなってしまった」のである。最後まで解散に反対する企業もあったが、結局は圧倒的多数に解散を望む声があがり、解散の道を選んだ。しかし、太田西部金属協同組合が解散しても、太田機械金属工業組合に加盟していることによって、現在も組合に加盟していた会社どうしで交流があるという。

(2) 株式会社アイテックのふいご祭り

太田西部金属協同組合では、先にみた足利鉄工団地協同組合のように組合全体でふいご祭りは行なっていなかった。しかし、アイテック株式会社や株式会社ヨシカワのように個別に行なっていたところはある。株式会社ヨシカワの吉川彰充氏（1939年生）によると、団地進出以前の旧工場時代（昭和27年（1952）頃）までは会社でふいご祭りを行なっていたとのことである。しかし、吉川氏の記憶にあるのはふいご祭りを寒い時期に行なっていたことくらいで、その詳細についての記憶は薄いという。吉川氏は「現在は設備も大きく変わってしまったので、もう行なっていない」という。現代の金属加工技術でも鍛冶職の仕事を連想するものに近いのがアイテック株式会社の切削加工があるが、株式会社ヨシカワではロール成形を主にしている。吉川氏はこのことがふいご祭りを行なっているか行なっていないかの違いではないだろうかとも述べておられた。切削加工というのは、その名が示すように被加工材を切削する加工の方法で、ロール成形というのは、被加工材をいくつかのロールの間に通すことにより変形させるという加工の方法である。切削加工の場合には鍛冶職の仕事を連想する可能性があるというのが吉川氏の見解である。その切削加工の株式会社アイテックでは先祖が野鍛冶であった時代から現代に至るまでふいご祭りを行なっている。ここでは、現在もふいご祭りを行なっているその株式会社アイテックの事例を取り上げてみる。

祭日 祭日は12月8を基準としているが、12月8日が休みの日の場合は、別の日にずれることがある。株式会社アイテックの工場長の糸井氏（1955年生）によれば、かつてのふいご祭りは忘年会の日でもあった。その日は従業員にお頭付きの魚に赤飯の折詰が配られ、仕事をいつもより早く切り上げて、工場内で飲食した。

供物 ふいご祭りの供物は、みかん、酒、洗米、塩、ニンジン、白菜である。カネヤマサマと呼ばれる掛軸がかけられる（写真8）。



写真8 アイテック株式会社のふいご祭りの供物

掛軸 アイテック株式会社を経営している今井家伝来の掛軸は、カネヤマサマと呼ばれているが、足利鉄工団地協同組合の金山彦命とは違い、三宝荒神のような憤怒の相の神が描かれている（写真9）。また、描かれたふいごのそばには、逃げる人の姿が描かれている。この逃げる人というのは、『鉄山必要記事』に書かれている「ふいご祭りを行なう由縁」⁽²⁰⁾に登場する追われ人と通じる要素である。これらのことから、カネヤマサマと言っても、それは記紀神話をもとに想定されている南宮大社系統の金山彦命ではなく、たたら製鉄や鍛冶職の間に伝えられている金屋子神や金山様といった民間信仰の中の神である可能性が考えられる。つまり、今井家伝来の祭神は南宮大社の金山彦命ではなく、鍛冶職としての今井家に伝えられてきた古い由緒をもつ祭神だと考えられるのである。



写真9 今井家伝来のカネヤマサマの掛軸

式次第 ふいご祭りは組み立て工場の中で行ない、10分ほどで終わる。そのふいご祭りの内容は、社長の講話と、塩と酒での散布のお祓い、二礼二拍手一礼である。鍛錬式

は行なっていない。また、神職は呼ばずに、社員だけで行なっている。そのふいご祭りが終わると、従業員に日本酒と、「風邪を引かないように」とカネヤマサマに供えたみかん2個を配っている。工場長の糸井氏によれば、先々代の義一氏の子である今井義久氏が社長だった時代からこのふいご祭りのことは聞いていたという。また、現在の経営者の今井秀一郎氏（1967年生）は、会社のふいご祭りが終わった後に、自宅の神棚の前で掛軸や供物をあげて拜んでいるという。

まとめ

このような足利鉄工団地協同組合と太田西部金属協同組合とそれぞれの参加企業について、そしてとくにふいご祭りの伝承について、の調査の結果として指摘できる点をまとめておくならば、およそ以下のとおりである。

第一に、この足利市と太田市の2つの事例を調査した結果、鉄材を扱う仕事には近代から現代にかけて4つの段階があることが確認できた。それは、①小林機械製作所が鍛冶屋として営業していた段階、②鍛冶屋が一つの鉄工所へと変わった段階、③それらの鉄工所

が工業団地に集まり協同組合を設立した段階（1960年代以降）、④その協同組合が存続して（足利鉄工団地協同組合）、あるいは解散して（太田西部金属協同組合）、単独の鉄工所として営業している現在の段階（2010年代）、である。

第二に、両者の協同組合についてその果たした役割などまとめてみると、それぞれ次のような特徴と相違点とがあったことが指摘できる。まず、足利鉄工団地協同組合の場合、もともとは町工場レベルの企業が単立して存在していた。団地の小組合になってからそれぞれの企業が企業として磨かれた部分が多くあり、市域の足利鉄工業協同組合という大組合と劣らないほどの存在感を持つようになった。たとえば今日では小組合に加盟している企業の経営者が大組合でも理事を務めるほどになっている。足利市域の大組合は加盟と脱退のスパンが短く大組合自体の歴史を書き残すような動きはみられない。足利鉄工団地協同組合の場合それぞれの企業が団地のその小組合で協力しあっている部分がいまだに多い。それに対して太田西部金属協同組合の場合、団地の小組合設立より以前から太田市域の大組合に加盟していた企業が多かった。しかし、足利の事例のようにその大組合におけるパートナーシップやキーパーソンが団地の小組合を作らせたわけではない。そして、たとえばO電機の社長が市域の太田金属工業組合という大組合ですでに理事を務めるほど力をもった存在であったことから、団地の小組合が結成される以前の市域の大組合のころからすでに企業運営の上で個々の企業が競争と洗練の状態となっていた部分が大きかった。それぞれの企業が独立しているために個別の企業ごとの挑戦が多く、またその生産規模が大きいのも太田の特徴である。太田では組合結成以前から企業単位を重視する組合方針が取られていたという点も自覚されていることが『創立20周年記念誌』の記述⁽²¹⁾からもわかる。このような足利と太田の両者の相違が、組合の存続と解散という近年の動きとなって現われているといつてよい。

第三に、ふいご祭りの伝承についてである。足利鉄工団地協同組合の場合は、いずれの企業もふいごを使っていた経験がほとんどなかった。しかし、次の①②③④のような経緯を経てふいご祭りを行なうようになった。①もともと足利市内の伊勢町の飯成神社の境内に祭られていた金山神社を昭和49年（1974）に団地内に移転させた。②団地協同組合への各企業の参加を働きかけた小林機械製作所はその前身は鍛冶屋で、その小林機械製作所で修業していて団地協同組合に参加した企業である相澤鉄工所などは自分の会社でふいご祭りを行なっていた。③同じく自分の会社でふいご祭りを行なっていたI機械製作所の現会長の父親が個人的に岐阜県の南宮大社の神職と交流があったことから、その南宮大社の金山祭りの鍛錬式を模倣して団地協同組合の金山神社に導入していき、組合に参加している各企業も自然にそれに参加していった。④しかし、そのふいご祭りで使用する鍛冶の道

具としてのふいごの実物は団地協同組合に参加した企業には伝存しておらず、かつて鍛冶屋であった外部の人からの寄付を受けてそのふいごを使ってふいご祭りを行なうこととなった。以上を経て現在にまで伝えられているのが足利鉄工団地協同組合の金山神社のふいご祭りである。一方、太田西部金属協同組合の場合は、組合の中の企業のただ1社、今井製作所だけが野鍛冶の出身であり、実際にふいごを使っていた事実と単独でふいご祭りを続けてきた歴史があった。そうした中で、団地協同組合としてのふいご祭りが創生されることはなかったが、今井製作所だけは企業単独でふいご祭りを継続しており、その今井製作所が解散してもその系譜を引く株式会社アイテックへと企業としての継承性が認識されており、ふいご祭りも継承されている。そして、そのふいご祭りではもと鍛冶職としての今井家伝来の古い由緒を伝える民間信仰の中の金山様が継承されているのである。このように足利と太田の両者の場合でのふいご祭りの伝承には大きな相違点があるが、ふいご祭りを伝承しているそれぞれの実態からみるならば、そこにはふいご祭りが内含している象徴力、つまり鍛冶職から金属工業へと展開しながらも金属加工業の先祖から子孫へという継承文化としてのふいご祭り、世代継承の中の自己確認としてのふいご祭り、という意味での伝承力が強く存在しているといっていよいであろう。

第四に、団地協同組合としてふいご祭りを伝承している足利鉄工業協同組合のふいご祭りで注目される点をあらためて整理してみるならば、以下のとおりである。(1) この祭祀儀礼の中で製作されるリングについてである。これは、岐阜県の南宮大社の本社のふいご祭りではみられないものである。足利鉄工団地協同組合ならではのオリジナルの製作物であり奉納物である⁽²²⁾。このような鍛錬式とその場での祭式的な毎年のリングの製作という儀礼的な行為からは、昨年のリングに今年のリングを繋いでいくという事実が示しているように、そこには参加企業と協同組合の連帯の継承性と永続性への願いが込められているといっていよい。(2) 鍛錬式における役に、ふいご、先手、横座、奉行などといった古い時代の鍛冶職の名前が継承されているという点についてである。これは、現在ですでに近現代的に高度に工業化された企業にあっても、かつての鍛冶職の時代の記憶とその当時の役割分担が、いわば記憶的な財産的な情報として、企業の存続と活性化の上でいまでも一定の意味とその役割をもち続けているということを示している。そして、その役の人選においては、会社の格付けではなく個々人の人物評価が重視されているという点も注目される。(3) かつてのふいご祭りは鍛冶職の家ごと、また会社ごとに行なわれるいわば私的な祭りであったが、しかしそれが鉄工団地協同組合の設立以後においては、組合に加盟しているすべての会社が参加し、さらには地域の学校の児童生徒や観光客も訪れるいわば社会に開かれた公的な祭礼イベントとなっているという点が注目される。それは、同時

に地域の神社の神職に依頼して祭式を執り行なういわば神社祭式となったことにも連動している。私的な鍛冶職の家での祭りから神社祭式を導入した公的な地域社会の祭礼への変化である。これらの（１）（２）（３）の３点からは、民俗伝承の中に存在する伝承と創造の作用力の両者を見出すことができる。いまあげた（１）と（３）からは、伝承の中に生まれている創造性を見出すことができ、（２）の点からは、伝承を支える継承力を見出すことができる。

第五に、本稿は日本民俗学の比較研究法の実践例として鍛冶とふいご祭りの伝承の全国的展開の状況について追跡してみた前稿⁽²³⁾に対応する事例研究として位置づけられるものであるが、前稿で注目した供物としてのみかんの伝承がこの事例でも確認された。鍛冶から鉄工所そして金属加工業へと企業の形態が変化してもみかんという伝統的な要素は継承されているのが確認された。しかし、その供物としてのみかんの意味についてはこの事例研究だけでは明らかにできないこともわかった。重要なみかんの伝承の歴史的な世界や意味論的な世界は前稿のような日本民俗学の比較研究法によってこそ明らかにできるものであるということが、この事例研究によってあらめて明らかとなった。

注

- （１） 黒田迪子「ふいご祭りの伝承とその重層性について―祭日・祭神・供物を中心に―」『國學院雑誌』第116巻第8号、國學院大學、2015
- （２） 両毛地域の産業研究としては、太田市と足利市の事例を取り上げた宇山翠の研究（宇山翠「産業集積のダイナミズム―両毛地域における織物から機械への再編―」中央大学、博士学位論文、2014 国立国会図書館デジタルライブラリーにて閲覧）が、工場の民俗については森清の研究（森清「工場の民俗」1-12『技術と人間』4（7）―5（6）、技術と人間、1975―1976）が、挙げられる。
 なお、ふいご祭りの研究は、沖縄のふいご祭りについて森栗茂一（森栗茂一「伝播技術独占の結果としての伝承―沖縄の奥間鍛冶屋伝承と轆祭」『日本民俗学』154、日本民俗学会、1984）が報告しているものの、まとまった研究は少ない。鍛冶の民俗を多く扱った朝岡康二は技術伝承が中心で、ふいご祭りについては「どこでもそうであるが、轆祭は本来の祭の性格がいまひとつ不分明で、多くはいろいろの神と習合しており、儀礼も少ない」（朝岡康二『鉄製農具と鍛冶の研究』法政大学出版局、1986）と述べるにとどまっている。
- （３） 中小企業振興事業団法は、中小企業の経済的社会的存立基盤の変化に対処し、中小企業構造の高度化を促進するために必要な指導、資金の貸付け等の事業を総合的に実施するとともに、中小企

業の経営管理の合理化及び技術の向上を図るために必要な研修、指導等の事業をあわせて行なうことにより、中小企業の振興に寄与することを目的とする、というものである。なお、衆議院HP（法律第五十六号（昭四二・七・一三）http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu05519670713056.htm）も参照のこと。平成27年9月15日閲覧）

- (4) 足利鉄工団地協同組合『足利鉄工団地協同組合 10年の歩み』1978の記述も参考とした。
- (5) 足利市史編さん委員会『足利市史』足利市、1978
- (6) 宇山翠「産業集積のダイナミズム―両毛地域における織物から機械への再編―」博士学位論文、2014
- (7) 菊地歯車株式会社社会長菊地義治氏（昭和12年（1937）生まれ）談。
- (8) 足利鉄工団地協同組合『足利鉄工団地協同組合 30年の歩み』1998
- (9) 足利鉄工団地協同組合『足利鉄工団地協同組合 10年の歩み』1978
- (10) 相澤鉄工所社長相澤真吾氏（昭和44年（1969）生まれ）談。
- (11) 前掲注（7）。
- (12) お話を聞かせてくださった方々の実名および会社名は明記させていただいた。特にご教示をいただいたのは相澤鉄工所の相澤真吾氏、菊地歯車株式会社の菊地義治氏、アイテック株式会社の今井秀一郎氏、株式会社ヨシカワの吉川彰充氏であった。ここに記して感謝の意を表しておきたい。ありがとうございました。
- (13) 前掲注（10）。
- (14) 前掲注（7）。
- (15) 前掲注（10）。
- (16) 足利織姫神社HP <http://www.orihomejinjya.com/entry15.html> も参照のこと。平成27年9月16日閲覧
- (17) 自由民主党群馬県支部連合会『県政風雲録』1985
- (18) それらの事情を含む両毛地域の産業の傾向については、前掲注（6）に詳しい。
- (19) 太田西部金属協同組合元事務局長須藤さく江氏談。
- (20) 下原重伸「鉄山必要記事」『日本庶民生活史料集成』10、三一書房、1970
- (21) 太田西部金属協同組合『テクノアリーナセイブ―Stage 21 20周年記念』1995
- (22) 南宮大社のふいご祭りでの奉納物は小刀である。
- (23) 前掲注（1）。

参考文献

下原重伸 「鉄山必要記事」『日本庶民生活史料集成』10、三一書房、1970

森清 「工場の民俗」1-12『技術と人間』4（7）—5（6）、技術と人間、1975—1976

足利市史編さん委員会 『足利市史』足利市、1978

足利鉄工団地協同組合 『足利鉄工団地協同組合10年の歩み』1978

森栗茂一 「伝播技術独占の結果としての伝承—沖縄の奥間鍛冶屋伝承と韃祭」『日本民俗学』154、日本民俗学会、1984

自由民主党群馬県支部連合会 『県政風雲録』1985

太田西部金属協同組合 『IT'S CHANGE！—輝ける明日にむかって…太田西部金属協同組合10周年記念』1985

朝岡康二 『鉄製農具と鍛冶の研究』法政大学出版局、1986

足利鉄工団地協同組合 『足利鉄工団地協同組合20年の歩み』1988

太田西部金属協同組合 『テクノアリーナセイブ—Stage 21 20周年記念』1995

足利鉄工団地協同組合 『足利鉄工団地協同組合30年の歩み』1998

宇山翠 「産業集成のダイナミズム—両毛地域における織物から機械への再編—」博士学院論文、2014